①月のいい晩でした。　②　ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。

語彙的・文法的意味・構造

・主語のない文（その晩は）
　天候や気温をあらわす文は、主語をいわないのが普通である。

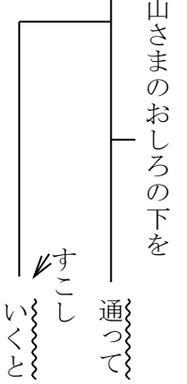
ぶらぶら（副）
(1)やや重い物が垂れ下がって揺れ動くさま。しっかり止まっていないさま。「腰掛けて足を―させる」　(2)特別な目的がなく歩くさま。また、のんびりと歩くさま。「その辺を―してくる」
(3)決まった仕事や日課がなく、漫然と過ごすさま。「退院して家で―している」(4)病気が治りきらないで長びくさま。「―と煩ひ付いたが、とうあつち物になつた滑稽本・浮世床（初）」

指導の要領・留意点

・月がいいばんでした。
　月だけがいいばんという感じ
　月のいいばんでした。
　月も美しいが、周りの景色も月に映えて美しい。寒くも暑くもなく、虫も鳴いているようないい晩という感じ。
・ごんは出かけた。遊びに出かけたのだ。これといった目的もなくぶらぶらと。外は、月のいい美しい晩なのだ。
・この時の、ごんの気持ちを考えさせる。今までのごんは、いつだって、いたずらをするために、ちょこちょこ出かけていた。そのごんが、ぶらぶらとあてもなく出かけるような、ゆったりしたいい気持ちになっている。
・兵十に心を寄せて、うなぎのつぐないを一生懸命しているごんは、兵十が、くりやまつたけを喜んでくれているだろうと思う満足感で、うきうきして、ぶらぶらと出かけずにはいられなかったのだ。
　＊　ここまで読めるだろうか？

③　中山さまのお城の下を通って、すこしいくと、細い道の向うから、だれか来るようです。　④　話し声がきこえます。　⑤　チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

・



・ようですー「ようだ」のていねいない方。ようすから、おしはかることができても、まだ、はっきり言い切ることができないときには、述語に「らしい」「ようだ」をつけくわえる。
　＊この三文が、現在・未来形で書かれていることも重要。物語の地の文における非過去形のになう役割として、読み手を物語の時間・空間に誘う役割がある。これが、過去形ならば、たんに、ごんの視点からの文ということになるが、非過去形であることで、読み手がその場に置かれているような感覚になる。

・来るようですー「来ます」と比較して教える。来る気配は感じているが、まだ、はっきり言い切れない。
・ごんが、中山さまのおしろの下を通って、少し行ったとき、細い道の向こうからだれかが来る気配が感じられた。あたりの静かなようすが読みとれる。
・話し声が聞こえますーかすかな話し声が、足音より先に、ごんに聞こえてきたのだろう。
・まつむしが鳴いていますーつぐないをたくさんして、心が豊かになっているごんには、まつむしの鳴き声が美しく、聞き取れている。月のいい晩、まつむしの声、美しい情景が描かれている。
　＊「つぐないをたくさんして、心が豊かになっているごんには…」は、はたして、そこまで読めるだろうか？

⑥　ごんは、道の片がわにかくれて、じっとしていました。　⑦　話し声はだんだん近くなりました。　⑧　それは、兵十と加助というお百姓でした。

・じっとしていましたー動作の継続
・近くなる＝近く＋なる…あわせ述語
・ごんは、やり過ごそうと思って、道の片側にかくれて、じっとしていたのだ。

⑨「そうそう、なあ加助」
と、兵十がいいました。
⑩「ああん？」
⑪「おれあ、このごろ、とてもふしぎなことがあるんだ」
⑫「何が？」

・そうそう＝（感）(1)思い出したときに発する語。「―、電話するのを忘れていた」(2)相手に対する同意や肯定の気持ちを表す語。「―、そのとおりだ」
・なあ＝（感）呼びかけたり念を押したりする際に用いる語。親しい間柄に使われる。な。「―、そうだろう」

・さっきから聞こえていた話し声が、だんだん近づいてきた。
＊「話し声は」を主語としていることについて考えさせる。
・はっとして、ごんが見ると、毎日毎日、くりやまつたけを持っていってやっている兵十と、加助だった。兵十と加助は、お百姓なのだ。
＊「だれか」がわかったということは、どういうことなのか。省略されているごんの姿を映像化させる。

・「そうそう」で、何がわかるか考えさせる。話題が変わったことがわかる。「そうそう」と、兵十がさっきまでと違う話を急に始めたのだ。どんな話が始まるかと、ごんは耳をこらしたにちがいない。
・⑩は、兵十から話しかけられ、何のことかわからない加助の、間の抜けた返事である。
・⑪は、兵十のことばである。「このごろ、とても不思議なことがあるんだ」という兵十のことばをきいて、ごんは、ますます耳をそばだてたにちがいない。
⑫は、加助のことばである。まだ、何の話かわからない加助は、「何が」としか、言えないのだ。

⑬「おっかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれにくりやまつたけなんかを、毎日毎日くれるんだよ」
⑭「ふうん、だれが？」
⑮「それがわからんのだよ。おれの知らんうちに、おいていくんだ。」

・

〔おっかあが――死んでからは〕
だれだか知らんが
おれに　くりやまつたけなんかを
（だれかが）――――――――くれるんだよ。
毎日毎日

〔おれの――知らんうちに〕
（だれかが）――――置いていくんだ。

・⑬は⑪の内容をうけている。
・「このごろ」―「おっかあが死んでから」
・兵十が、不思議に思っているなかみが書かれている。それは、おっかあが死んでから、だれかが、毎日毎日、くりやまつけなんかをくれることだったのだ。
・「だれだか知らんが」―どういうわけで、だれが、毎日毎日、くりやまつけをくれるのか、どう考えても、兵十には思いあたることがないのだ。
・兵十が不思議がっていることが、自分の行為であることを知った。ごんは、兵十たちの話の続きが気になってしかたがないことだろう。
・⑭は、加助の相づちである。兵十が「だれだか知らんが」といっているのに、「ふうん、だれが。」と、間の抜けた相づちである。
・⑮は、加助の相づちに対する、兵十の返事である。

⑯ ごんは、ふたりのあとをつけていきました。
⑰ 「ほんとかい？」
⑱ 「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。そのくりを見せてやるよ」
⑲ 「へえ、へんなこともあるもんだなあ」
⑳ それなり、二人はだまって歩いていきました。

・つけていく＝つける＋いく
人のあとをそっとついて行くこと
・かい＝（終助）文末に付いて、質問・反問の意を強める。か。
「入ってもいいです―」「そんなことあるもん―」
・とも＝（終助）活用語の終止形に接続する。強い断定でもって言い切る場合に用いる。『『ほんとに行くのか』『行く―』』「そうだ―。昔はよく勉強したものだ」
・へえ＝（感）(1)驚いたり、感心したり、疑ったりした時にいう言葉。「―、彼が結婚したとはねえ」「―、本当かね」(2)（主に関西地方で女性が）応答・承諾などに用いる語。「―、おおきに」
・それなり＝(1)その状態のまま。そのまま。それきり。副詞的にも用いる。「予算の関係で中止したまま、―になっている」「―向こうに居着いてしまった」(2)限界や欠点はあるが、それはそうとして。それ相応に。「―にうまくやっている」
・歩いていきました…遠のき態

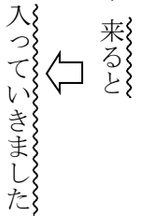
・ごんは、兵十の話の続きが気がかりで、二人のあとを見失わないように、見つからぬように追っていったのだ。
・⑰は、兵十の⑮「おれの知らんうちに…」に対しての加助の問いかけである。
・⑱は、加助の問いかけに対して、ほんとであることを強要している。「ほんとだ」「ほんとだとも」を比較して教える。
・⑲は、兵十が⑱「そのくりを見せてやるよ」と断言するのを聞いて、半信半疑の加助のことばである。
・兵十は、加助に打ち明けてはみたが、何の手がかりもえられず、加助も思いあたることもなく、話は、それっきり途絶えてしまい、二人は、だまって歩いていった。それぞれに、心にひっかかるものを感じ、いろいろ考えながら、歩いていったにちがいない。

21 加助がひょいと、後ろを見ました。22 ごんはびくっとして、小さくなってたちどまりました。23 加助は、ごんには気がつかないで、そのままさっさとあるきました。

・ひょいと＝（副）不意に
・びくっとする
びくつく＝(1)こわがってびくびくする。「先生に怒られないかと―・いている」
びくびく＝(1)恐怖や不安に恐れおののいているさまを表す語。「いつしかられるかと―している」(2)体の一部などが小刻みに震え動くさまを表す語。「体を―（と）動かす」
・さっさと＝（副）(1)迷ったり他に気を取られたりしないで早く行うさま。「―帰る」「―歩け」(2)冷淡に物事を行うさま。「呼んだのに―行ってしまう」(3)滞りなく、手際よく行うさま。「―仕事を片付ける」(4)風・波・水の音などを表す語。

・だまって歩いていた加助が、不意に、後ろを見た。さがしたり、見つめたりするような見方ではなく、何気なく見たのだろう。
・21 の加助の動きに対するごんのようすが 22 に書かれている。びくっとして、小さくなって立ち止まったということから、ごんが、二人にごく近い所を歩いているということ、夜であるのに、気づかれたなのではないかと思い、見つからないようにしていることが読みとれる。
・22 に、書かれているごんの気持ちとは対照的な加助の姿が、23 にえがかれている。

24 吉兵衛というお百姓の家まで、二人はそこへ入っていきました。

・


（遠のき態）

・加助と兵十は、吉兵衛というお百姓の家まで来ると、その家へ入っていった。二人は、何かの用事で吉兵衛のうちへ来たのだ。二人は、ごんの前から姿を消してしまった。

25 ポンポンポンポンと木魚の音がしています。 26 まどのしょうじに明かりがさしていて、大きなぼうず頭がうつって動いていました。 27 ごんは、

ーおねんぶつがあるんだなー

と思いながら、井戸のそばにしゃがんでいました。

・木魚の音がしています
ぼうず頭が…動いていました。
ごんは…しゃがんでいました。
動作の継続
・明かりがさしていて…　結果の継続

・木魚＝経を読む時にたたく木製の仏具。ほぼ球形で中空、横に割れ目があり、魚の鱗（うろこ）が彫りつけられている。禅寺で合図に打ち鳴らす魚板（ぎょばん）から変化したもの。
・さす（差す）＝（動）(1)（「射す」とも書く）光が入り込む。日光が当たる。「窓から日が―・す」 (2)相撲で、自分の腕を相手の腕と胴の間に入れてまわしをつかむ。「立ち合い一気に左を―・す」 (3)相手に酒をすすめる。「杯を―・す」 (4)（「点す」とも書く）ある部分に色をつける。「口紅を―・す」 (5)（「点す」とも書く）漢文の文章に、句読点や訓点を書き入れる。加点する。 (6)手を、上または前のほうに出す。(ア) 頭をおおうように傘を持つ。かざす。「日傘を―・す」(イ) 舞で、手を前に伸ばす。「―・す手引く手」(ウ) 両手で物を高く上にあげる。さしあげる。(7)潮が満ちてくる。「潮が―・してくる」
・念仏＝（名）(1)仏の姿や功徳を心に思い描くこと。(2)阿弥陀仏の名を唱えること。浄土教では阿弥陀仏の名を唱えることにより浄土へ救済されると説く。ねぶつ。「―を唱える」

・25 26は、兵十たちが入っていった吉兵衛の家を、ごんが外から見たようすである。兵十たちが、吉兵衛の家へ入ったときには、もう、木魚の音は始まっていて、今も続いている。また、窓の障子には、明かりが差していて、明かりで拡大された僧侶の頭が映って動いた。
・木魚の音や、障子に映し出された大きな坊主頭から、ごんにはお念仏があるんだなと、すぐにわかった。ごんは、井戸のそばにしゃがんで、じっとしていた。（お念仏なら長くかかるぞ。兵十たちはすぐには帰らないぞ）と思いながら、じっと吉兵衛のうちの方を見て、兵十たちの帰りを待っているのだ。
・ごんは、兵十と加助のさっきの話の成り行きが気になって、その場をはなれることができなかったことが読みとれる。

28 しばらくすると、また三人ほど、人が連れだって、吉兵衛の家へ入っていきました。 29 お経を読む声が聞こえてきました。

・つれだつ＝（動）いっしょに行く。伴って行く。「友達数人と―・って映画を見に行く」
・入っていきました…遠のき態
・聞こえてきました…近づき態

・兵十たちが吉兵衛の家へ入っていって、しばらくたったとき、村人が三人ほど連れだってやってきて、しゃがんでいるごんの前を通って、吉兵衛の家へ入り、ごんの前から、姿を消してしまった。
・まもなく、吉兵衛の家から、お経を読む声が聞こえてきた。先ほどやってきた人たちで、人数がそろったのであろう。外で、しゃがんでいるごんには、お経を読む声が聞こえてきたのだ。
・四には、ゆったりした気持ちのごんが、たまたま、兵十と加助に出会い、兵十がくりのことについて話を始めたので、話の続きを期待して、じっと待っているようすが描かれている。